

平成 30 年 6 月 14 日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2017

課題番号：25862259

研究課題名(和文) 幼児の問題行動が減少することを旨とした地域における子育てプログラムの効果の検証

研究課題名(英文) Investigation for effect of CARE (Child-Adult Relationship Enhancement) in local community to reduce child's problem behaviors

研究代表者

木村 一絵 (Kimura, Hitoe)

九州大学・医学研究院・助教

研究者番号：30432909

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：CARE (Child-Adult Relationship Enhancement) は、親子関係をよりよくし、幼児との絆を深める心理介入プログラムである。

本研究は、幼児(2-6歳)の問題行動が減少することと母親の精神状態を改善することを旨とした地域保健分野におけるCAREプログラムの効果を検討することを目的とした。

その結果、CAREプログラムは、3.5時間という短い1回の介入であるが、子どもの行動や母親の精神状態・認識・行動を改善できることが示唆された。さらに、フォローアップの1.5時間の介入で、CAREプログラムで改善した子どもの行動や母親の精神状態・認識・行動を維持できることも示された。

研究成果の概要(英文)：CARE (Child-Adult Relationship Enhancement) is a psychological intervention program that improves parent-child relationship.

This study aimed to examine the effect of the CARE program in the community health field for reducing child problem behavior (2-6 years old) and improving the mental health of mothers.

As a result, the CARE program was one intervention (3.5 hours), but it was suggested that children's behavior and the mental condition, recognition, and behavior of mothers could be improved. In addition, it was shown that the child's behavior improved by the CARE program and the mental condition, recognition, and behavior of the mother can be maintained by a follow-up 1.5 hour intervention.

研究分野：地域看護学

キーワード：子育てプログラム 幼児の問題行動 母親 CARE 地域保健 育児ストレス

1. 研究開始当初の背景

CARE: Child-Adult Relationship Enhancement (Pearl,2008) は、米国オハイオ州シンシナティーこども病院で開発された、親子関係をよりよくし、幼児との絆を深めることを大切に心理教育的介入プログラムである。海外において幼児の問題行動が減少するという効果が認められている心理療法には PCIT: Parent-Child Interaction Therapy (Eyberg,1988) などがあり、通常 12 回～20 回 (1 回 60～90 分) の親子で参加する治療法である。しかし、PCIT は最短でも 12 時間かかるため、負担が多いという欠点もある。その点、親などの養育者を対象とする CARE は、PCIT の中心概念を合計 3～5 時間程度のワークショップで学べる、集団を対象に実施する内容に改良したプログラムである。PCIT と同様に CARE に参加し、学んでいただいた内容を実践していただくことで、地域保健分野において、幼児の問題行動が減少することが期待でき、このプログラムを受けていただき実践することで、幼児との温かい関係づくりができることを実現できるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、幼児の問題行動が減少することと母親の精神状態を改善することを目指した地域保健分野における CARE の効果を検討することを目的とした。

3. 研究の方法

1) 研究対象

(1) 適格基準

母親と幼児の絆を深め、幼児 (プログラム参加時に 2 歳～6 歳) の問題行動を減少することを希望し、以下の基準をすべて満たす健康な母親

CARE プログラム (事前調査と事後調査を含む) すべての日程に参加を同意した場合

日本語で十分なコミュニケーションが可能であり、意思決定に支障がない場合

20 歳～64 歳で書面にて同意が得られた場合

CARE プログラムの参加が初めての場合

(2) 除外基準

以下の基準に 1 つでも該当する者

事前調査時から半年以内に重大なライフイベント (近親の死や重い疾患) を経験した場合

研究者が不適格と判断した場合

2) プログラムの実施方法

研究デザインは、研究 1 の Randomized controlled trial と、研究 2 の前向き単群前後比較介入研究とした。

研究 1 は、研究参加申込者に対して研究の説明後に研究参加の同意を得た。また、同意の得られた母親を、事前調査の結果によって、ランダムにプログラム参加群と Waiting list 群とに分け、プログラム介入を実施した。介

入するプログラムは、CARE プログラム 1 回 (3.5 時間) とし、母親はこのプログラムに参加し、介入 4 週間後に介入後の調査を実施した。

研究 2 は、研究 1 と同様に、研究の説明を行った上で、同意の得られた母親に対し、研究 1 と同様に CARE プログラムを 1 回 (3.5 時間) の介入を実施し、介入 4 週間後に介入後の調査を実施した。また、介入後調査と同じ日にフォローアップ 1 回 (1.5 時間) の介入を実施した。さらに、フォローアップの介入 4 週間後にフォローアップ後の調査を実施した。

調査項目は、研究 1・2 とともに、対象者や対象となった子ども属性、子育てに関する意識、子どもの行動評価 (ECBI: Eyberg Child Behavior Inventory の 36 項目、頻度スコアと問題数スコア)、対象者のうつ (TQCI: Two-question care-finding instrument の 2 項目)、育児ストレス (PSI-SF: Parenting Stress Index Short Form の 36 項目、育児ストレス合計と下位項目である「親の苦悩」「親子相互作用機能不全」「むずかしい子ども」)、親の養育行動と関係性認知 (合計とその下位項目である「子どもとの否定的な関係性」「子どもへの否定的な養育行動」「子どもへの肯定的な養育行動」、事後質問 (参加目的の達成状況、CARE の実施とスキルの意識・定着、役に立ったスキルやプログラムの満足度、問題行動軽減効果、幼児に対する意識の変化、幼児との絆の深まり、CARE に関する認識と意見など) とした。

3) プログラムの内容

CARE プログラムの内容は、前半部分と後半部分の 2 部から構成され、プログラムの前半は、子どもとの関係を築くために、子どものリードについていくことの意義や、そのために大切なできるだけ増やしたいスキルと、できるだけ減らしたいスキルについて、心理教育と具体的なロールプレイの見学・実践を通して習得する。プログラムの後半は、子どもが親に従うことが必要な場面において、子どもが言うことをきけるように、一貫した態度で効果的かつ適切に指示が出せるために、参加者が大人役と子ども役の立場を変え実施するロールプレイによって、楽しくスキルの習得を図っていく。CARE プログラムを対象者に実施するには、CARE-Japan が実施するトレーナートレーニングを受講し、トレーナーとして認定されたものが教育を行う必要があるため、トレーナーの資格のある者がプログラムを実施した。

4) 倫理的配慮

研究開始に先立ち、研究者の所属する倫理委員会に研究計画書を提出し、審査において許可された後に、研究を開始した。

4. 研究成果

1) 研究 1 の研究成果

研究対象となった 2 歳～6 歳の幼児の母親

99名に対し、事前調査を行い、プログラム参加群とWaiting list群にランダムに分けた。プログラム参加群に対し CARE プログラム実施し、4週間後の介入後調査を終了した、プログラム参加群44名とWaiting list群47名を分析対象とした。

プログラム参加群とWaiting list群の研究対象者の母親の年齢、子どもの月齢・性別、兄弟姉妹の有無、出生順位、行動に関する障害の有無、子どもの問題行動、母親の育児ストレス、母親のうつなどに、有意な違いはなかった。

プログラム介入後、プログラム参加群とWaiting list群のプログラム介入前後の変化量を比較したところ、子どもの問題行動には違いがみられなかったものの、母親の育児ストレスの合計と育児ストレスの下位項目である「むずかしい子ども」では、プログラム参加群がWaiting list群に比べて有意にストレスが軽減していた。母親の養育行動と関係性認知の合計とその下位項目である「子どもとの否定的な関係性」も有意に改善し、不適切な育児も有意に減少していた。

CAREプログラムは、母親の育児ストレスと子どもの扱いをむずかしいと感じることを軽減し、母親の養育行動と関係性認知、特に子どもとの否定的な関係性を改善し、不適切な育児を減少する効果が示唆された。

2) 研究2の研究成果

研究対象となった2歳~6歳の幼児の母親99名に対し、事前調査を行い、CAREプログラム実施し、4週間後の介入後調査を終了し、フォローアップの介入を受け、フォローアップの介入4週間後にフォローアップ後の調査を終了した母親を、分析対象とした。現在、2017年度の介入の分析途中であるため、2015年度と2016年度の対象48名に対し、CAREプログラムとフォローアッププログラムの両方に参加し、その後の調査を終了した38名の結果を以下に報告する。

母親の平均年齢は37.79歳(SD 3.97)、子どもの平均月齢47.0か月(SD 15.01)であった。子どもの性別は男児25人(65.8%)、女児13人(34.2%)、兄弟の有無は有23人(60.5%)、無15人(39.5%)、子どもの行動に関する診断や障害の有無は、有9名(23.7%)、無29名(76.3%)であった。

子どもの行動の頻度スコアは有意に減少しなかったものの、子どもの行動の問題数スコアはプログラム介入後に有意に減少し、フォローアップ介入後は減少が維持できていた。母親の育児ストレスは、育児ストレス合計と下位項目である「むずかしい子ども」はプログラム介入後に有意に減少し、フォローアップ介入後は減少が維持できていた。さらに、母親のうつや養育行動と関係性認知、不適切な育児も、プログラム介入後に有意に改善し、フォローアップ介入後は減少が維持できていた。

事後質問の結果において、参加目的が子どもとの絆を深めることであった母親は9割と多く、次に子育てのスキルを学ぶことであった。参加目的の達成度は介入後7割程度よりフォローアップ後8割とさらに高くなっていた。CAREの実施はスキルを心がけるようになった母親がほとんど全員であり、遊びの中でスキルを実践した母親は7割程度であった。また、スキルが定着したと思う母親は2割程度と少なかったが、子どもとの関係に役に立ったと答えた母親は4~5割であった。役に立ったスキルは、増やしたい3つのスキルが多かった。さらに、プログラムの満足度は高く、問題行動軽減効果、幼児に対する意識のいい変化、幼児との絆の深まりを感じた母親がほとんどであった。

CAREプログラムは、3.5時間という短い1回の介入であるが、子どもの行動や母親の精神状態・認識・行動を改善できることが示唆された。さらに、フォローアップの1.5時間の介入で、CAREプログラムで改善した子どもの行動や母親の精神状態・認識・行動を維持できることも示された。地域保健分野において、CAREプログラムはグループ介入であり、短いため、介入しやすいプログラムであり、子どもと母親の両者に対する効果も期待できる可能性が高い。今後は地域保健における子育て支援を目的とした効果的な介入の提案ができるように、今後も研究を継続していく予定である。

5. 主な発表論文等

[学会発表](計12件)

Hitoe Kimura, Yukako Shigematsu, Toshiko Kamo, Yuka Fukumaru, Ikuko Kato, Etsuko Kamura, Hidemi Chiba, Eriko Uchida, Yukiko Yamashita, Akihiko Nishioka, Contents of child's problem behavior reduced by CARE program and follow-up program in a local community health; a prospective intervention trial, 21st EAFONS, 2018.1.

木村 一絵, 重松由佳子, 地域保健における CARE プログラムとフォローアッププログラム参加による軽減した育児ストレス内容, 日本看護科学学会, 2017.12.

木村 一絵, 重松 由佳子, 加茂 登志子, 福丸 由佳, 加藤 郁子, 賀村 悦子, 千葉 秀美, 内田 絵利子, 山下 由紀子, 西岡 昭彦, 幼児の母親に対する CARE プログラム実施における育児に関する認知と態度の変化, PCIT-Japan CARE-Japan 合同研究会, 2017.11.

木村 一絵, 賀村 悦子, 重松 由佳子, 地域保健における CARE プログラムとフォローアッププログラムの子どもの行動と母親の認識・行動の変化, 日本地域看護学会第20回学術集会, 2017.08.

木村 一絵, 重松 由佳子, 加茂 登志子,

伊東 史工, 福丸 由佳, 加藤 郁子, 賀村 悦子, 千葉 秀美, 内田 絵利子, 山下 由紀子, 西岡 昭彦, 育児中の母親に対する CARE プログラムの不適切な接し方を軽減する効果, PCIT-Japan CARE-Japan 合同研究会, 2016.12.

Hitoe Kimura, Yukako Shigematsu, The changes in children's problematic behaviors and mother's parenting stress after participating in the CARE program in a local community health center; a prospective intervention trial, Japan Academy of Nursing Science, 2016.12.

Hitoe Kimura, Yasuko Shigematsu, Toshiko Kamo, The effect of CARE Program in health center to reduce children's problematic behaviors and mother's parenting stress, Randomized controlled trial, The 2016 International Collaboration for Community Health Nursing Research Symposium, 2016.09.

Hitoe Kimura, Toshiko Kamo, Fumie Ito, Factors related to children's problem behaviors -The difference between the number of children's problem behaviors and the frequency of children's problem behaviors, The 3rd KOREA-JAPAN Joint Conference on Community Health Nursing, 2016.07.

Toshiko Kamo, Hitoe Kimura, Fumie Ito, Yuki Sunohara, Depressive mothers report moer serve ECBI scores of their children - Study from Japanese Kindergarten, PCIT International Convention, 2015.09.

Hitoe Kimura, Toshiko Kamo, Yuki Sunohara, The relation between a mother's depression, her self-evaluation as a mother and a child's problematic behavior, 6th World Congress on Women's Mental Health, 2015.03.

木村 一絵, 重松 由佳子, 賀村 悦子, 釋河野 公美, 中富 敬子, 前田 英光, 多職種協働による療育教室参加家族を対象とした CARE の試み, PCIT-Japan CARE-Japan 合同研究会, 2014.12.

Fumie Ito, Toshiko Kamo, Yuki Sunohara, Shima Furuichi, Hitoe Kimura, Japanese version of Eyberg Child Behavior Inventory(ECBI): A Evaluation of Japanese norms, PCIT International Convention, 2013.09

〔その他〕

新聞掲載

西日本新聞 (2017年10月28日朝刊)、中日新聞 (2017年12月15日朝刊) に、研究内

容である CARE プログラムに関する記事が掲載された。

https://www.nishinippon.co.jp/feature/life_topics/article/369493/ (2018.6.14)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木村 一絵 (KIMURA, Hitoe)
九州大学大学院医学研究院・助教
研究者番号: 30432909

(2) 研究協力者

重松 由佳子 (SHIGEMATSU, Yukako)
加茂 登志子 (KAMO, Toshiko)
福丸 由佳 (FUKUMARU, Yuka)
石垣 和子 (ISHIGAKI, Kazuko)
賀村 悦子 (KAMURA, Etsuko)
千葉 秀美 (Chiba, Hidemi)
内田 絵利子 (UCHIDA, Eriko)
山下 由紀子 (YAMASHITA, Yukiko)
西岡 昭彦 (NISHIOKA, Akihiko)